

キーツの「怠情のオード」再考

山 本 由美子

John Keats's "Ode on Indolence" Revisited

Yumiko YAMAMOTO

John Keats's "Ode on Indolence" (1819) has traditionally received little acclaim, all but dismissed as one of the poet's poorer works. Despite this fact, however, it is the writing of this poem that Keats enjoyed more than anything else in 1819, as Keats himself admits in a letter he wrote that year. The ode is actually a valuable piece by the poet, in that it offers us one of the very few opportunities to witness Keats reveal his genuine feelings. In this respect, it can be argued that the poem may serve as an excellent medium through which Keats's private emotions and innermost needs that are well-hidden in his other odes can be understood perhaps even more effectively because of its form that is somewhat less refined.

Moreover, Keats's feelings that were torn between "Indolence" and the "three figures" consisting of "Love", "Ambition", and "Poesy" are probably closer to those of today's readers who are said to be lost in our hectic world and in need of emotional healing. Finally, in this researcher's opinion, "Indolence", or "nothingness", in "Ode on Indolence" may be considered to contain certain key elements that would later develop into the "Negative Capability", a concept critical to an accurate understanding of Keats and his works.

This paper is an attempt to re-establish the significance of Keats's "Ode on Indolence" as an honest reflection of his inner feelings at a pivotal stage of his life, and also as an exercise for his later works together with an explanation of the ode's refreshing and healing appeal in its contemporary context.

John Keats の Ode 研究 は, “Ode to a Nightingale”, “Ode on a Grecian Urn”, “To Autumn” を中心としたものが圧倒的に多く, 1819年春に執筆された “Ode on Indolence” は軽視され評価も低い。実際に S. Colvin は “less highly wrought and more unequal than the rest”¹⁾ と批判し, A. Lowell は “much the poorest of his odes proper”²⁾ と酷評している。しかし, Keats 自身が手紙の中で, “the thing I have most enjoyed this year has been writing an ode to Indolence”³⁾ と書いていること, また, 彼にしては珍しく感情の赴くままに命令文で最終行を結んでいる点からも, 詩人 Keats の本心が表出したものとして, 彼の真情を探るのに不可欠な作品と言える。

“Ode on Indolence” の中で, Keats はすべてを忘れて “Indolence” に浸りたいと願うが, 初めに “three figures” と表現され, 後に “Love” と “Ambition” と “Poesy” であることが判明する三者が Keats のもとを幾度も訪れ惑わせる様が描かれている。これは, Keats とこの三者との関係が密接で, これらに対する彼の執着がいかに強いものであるかを表している。“three figures” への断ち難い思いと, “Indolence” への憧憬の狭間で揺れる Keats の姿は, 厳しい現代社会に生きる我々にも共感を与え, 一種の救いをもたらすものであるという点で再考に値する。

本稿では, 詩作時の Keats の心理状態を, “Ode on Indolence” に見られる心理的動向と照らし合わせながら論を進める。そして, 詩中の “nothingness”, もしくは “Indolence” は, Keats が目指す「半知の状態でいられる能力」である “Negative Capability” の萌芽とも言えるので, “Negative Capability” にも注目する。さらに, 詩中の Keats の魂の叫びが現代の読者の心情といかに通じるものであるかを述べ, 時を越えた本詩の魅力を明らかにする。

A. C. Downer が “the three influences, fascinating yet painful”⁴⁾ と呼ぶように, Keats にとって “Love” と “Ambition” と “Poesy” は魅惑的な影響物で, 生きるための支柱であるが, 重要であるがゆえに重荷でもあった。まず, この三要素が歓喜と苦悩をもたらす様を本詩の中で辿ってみる。

第一連で, 人影が白衣をまとい首をもたげ手をあわせ横を向いていて, 静かにひとりひとり過ぎ去っては戻ってくるが, 見慣れぬ者であり Keats は気に留めない。

1) Sidney Colvin, *Keats* (London: Macmillan, 1929) 174.

2) Amy Lowell, *John Keats* vol. 2 (London: Jonathan Cape, 1924) 260.

3) John Keats “To Mary-Ann Jeffery,” 9 June 1819, *Letters of John Keats*, ed. Robert Gittings (Oxford: Oxford University Press, 1970) 259. Keats の手紙からの引用はすべてこの版により, 以下, 宛先人, 日付と頁数を記す。

4) Arthur C. Downer, *The Odes of Keats* (Folcroft: The Folcroft Press, 1969) 91.

第二連では、怠惰な気分に関することを願いながらも、三人の人影が沈黙の仮面を着けていることが気掛かりでその企みを探りたいと思い始める。そして、なぜ消え去って無だけにしてくれないのかと詰問する。

第三連では、三者が三度目にして初めて一瞬顔を向けて再び消えていくが、最初が愛、二番目が野心、三番目がポエジー、あるいは詩であることがわかったと追い求める。

第四連ではまず、愛を求めたことを悔やみ、愛の不在を訴え、次に野心の虚しさを嘆き、さらに詩の喜びを否定する。これは、Keats が詩作時に Fanny Brawne との恋愛を成就できないでいるもどかしさを抱いていたことや、詩人として世に認められたいという野心を持っていたにもかかわらず評価を得られなかったという彼の経験と関係するものと思われるが、この点については後で詳述する。そして、この連の最後で煩いのない歳月を願う。

第五連で、三者が訪れる前の幸せだった時を懐かしみ、これらの幻影に別れを告げる。

そして、最終の第六連で、詩の賞賛をも求めないという姿勢を示した後で、これらの幻が目の中から去ることを望み、そして、雲の中に姿を消して二度と戻らないように命じて詩行を結ぶ。

詩中に見られる “Love” と “Ambition” と “Poesy” への別れの言葉の繰り返しは、これらとの決別が不可能であると感じさせる。“Love” と “Ambition” と “Poesy” からの逃避を願いながら、この三者の魅力にとりつかれるという自身のこの複雑な心境に苦悩し、Keats は安らぎを求めて “Indolence” への憧れを募らせることになる。そこで、次に “Indolence” に対する Keats の思いに注目する。

1819年3月19日の George 夫妻宛の手紙の中に “Ode on Indolence” 創作の着想についての暗示がある。

Yesterday I got a black eye — the first time I took a Cricket bat — Brown...
I lay down on the eyelid, ... though the ball hit me directly on the sight. ... This morning
I am in a sort of temper indolent and supremely careless: I long after a stanza or two of
Thompson's Castle of indolence....In this state of effeminacy the fibres of the brain are
relaxed in common with the rest of the body, and to such a happy degree that pleasure
has no show of enticement and pain no unbearable frown. Neither Poetry, nor Ambition,
nor Love have any alertness of countenance as they pass by me: they seem rather like
three figures on a greek vase — a Man and two women — whom no one but myself
could distinguish in their disguisement. This is the only happiness; and is a rare

instance of advantage in the body overpowering the Mind.⁵⁾

前日の3月18日にクリケットのボールがあたって負った目の怪我のため無力感に陥り、この状態を“indolent”と呼んでいる。脳の組織も他の部分とともに弛緩し、とても幸せな気分で、快感も激しい苦痛も感じないと書いている。そして、“Poetry”と“Ambition”と“Love”は厳しい表情を見せず、ギリシャの壺に描かれた三人の人物のように見え、三者を見分けられるのは自分しかいないと述べる。さらに、この状態こそが幸福であり、肉体が精神を征服する時に生じる利益の稀な例であると明かす。

このように、Keatsにとって怠惰で幸せな気分は、怪我のため意識が朦朧として、肉体の痛みが支配的である時に限られた一時的なものである。この三月の経験に着想を得て、五月に“Ode on Indolence”を創作したと思われる。しかし、完成作は“Indolence”の喜びだけに浸るKeatsの姿を映し出してはいない。先に引いた手紙で、“figures”は厳しい表情を見せず、しかも通り過ぎていくが、詩中では、Keatsのもとを繰り返し訪れては惑わせ、容易に“Indolence”に向かわせない。むしろ“Indolence”に酔うことの難しさが浮き彫りにされている。

それでもKeatsは“Indolence”への憧憬を抱き続けるが、次に、このKeatsの姿を詩行の中で追うことにする。“... Ripe was the drowsy hour; /The blissful cloud of summer indolence/Benumbed my eyes; my pulse grew less and less; / Pain had no sting, and pleasure's wreath no flower”⁶⁾という箇所では、夏の日 of 怠惰の祝福に満ちた雲が目にくらませ、脈が弱まり、苦痛も快感もないと書いている。喜びもないが痛みもない幸せを、つまり、無感覚の中で得られる安らぎをKeatsは忘れられないでいる。続けて、“Oh, why did ye not melt, and leave my sense/Unhaunted quite of all but — nothingness?” (19-20)と問いかけ、すべてから解放されること、すなわち、無の状態を求める。

そして、第三連で“figures”の正体が、“Love”と“Ambition”と“Poesy”であることを確信すると、一瞬この三者に焦がれて追うための翼を求める。しかし、第四連で思いどまり、“Oh, for an age so sheltered from annoy/That I may never know how change the moons, / Oh hear the voice of busy common-sense!” (38-40)と、時の推移にも俗事にも無縁の、煩いのない歳月に憧れる。

5) To George and Georgiana Keats, 14 February-3 May 1819 228.

6) “Ode on Indolence,” 15-18. Miriam Allott, ed., *The Poems of John Keats* (London: Longman, 1970). なお、Keatsの作品からの引用はすべてこのテキストにより、以下本詩からの引用については行数を本文中に記す。

さらに第五連では最も多くの詩行を割いて“Indolence”の喜びを次のように歌っている。

My sleep had been embroidered with dim dreams;
My soul had been a lawn besprinkled o'er
With flowers, and stirring shades, and baffled beams.
The morn was clouded, but no shower fell,
Though in her lids hung the sweet tears of May;
The open casement pressed a new-leaved vine,
Let in the budding warmth and throstle's lay; (42-48)

眠りがほの暗い夢に縫い取られ、花と影と光が心にちりばめられ、朝は曇り空ではあるものの雨を降らせず、窓は葡萄蔓を押し出し、新芽の温かさつつぐみの声を導き入れる。この図はまさに“Indolence”の至福を表している。眠りに夢があり、心には色彩と音色の調和が見られ、温度と穏やかさが感じられる。

そして、最終連で、“Ye cannot raise /My head cool-bedded in the flowery grass” (51-52)と書いているように、“three Ghosts”の誘いをもってしても花咲く草に涼しく横たえた詩人の頭を起こすことはできないと述べ、“Indolence”の魅力が“three Ghosts”の誘惑に勝ることを示している。

このように、“Indolence”に魅了される Keats ではあるが、前述したように、“Love”と“Ambition”と“Poesy”への思いが断ち難いことも明らかである。その心情は最終の第六連で最も顕著に表れる。

So, ye three Ghosts, adieu! Ye cannot raise
My head cool-bedded in the flowery grass;
For I would not be dieted with praise,
A pet-lamb in a sentimental farcel
Fade softly from my eyes, and be once more
In masque-like figures on the dreamy urn.
Farewell! I yet have visions for the night,
And for the day faint visions there is store.
Vanish, ye Phantoms, from my idle sprite
Into the clouds, and never more return! (51-60)

このように“three Ghosts”への決別を執拗に繰り返す様は、却って彼の強い執着心を感じさせる。さらに、“So”と“For”の接続詞が説明的であり自らに言い聞かせるような印象を与えることや、“yet”という語が昼夜幻影にとらわれている様子を強調することからも窺える。この点について C. L. Finney も “He still had hope of attaining some measure of fame in poetry and some measure of happiness in love”⁷⁾ と述べ、Keats が詩の名声と愛の喜びの手段を模索していると指摘している。このように、Keats は “Indolence” への逃避願望と、“Love” と “Ambition” と “Poesy” への執着の間で逡巡するのである。

勤勉で真面目な性格であるため “Indolence” に完全に身をゆだねられない Keats にとって、無感覚や完璧な忘却は死を意味すると言える。確かに J. Holloway の言う⁸⁾ ように、“nothingness” は “easeful Death”⁹⁾ と類似している。また、“Ode on Indolence” と同時期に書かれた “Why did I laugh to-night?” の中でも死を求めている。しかし、いかに望もうとも実際に命を絶つわけにはいかない。命ある限り生を全うせざるをえない。となれば、死への叶わぬ憧れは詩中に表すしかないのである。その点で、Keats が本詩について、先にも触れた1819年6月9日の Mary-Ann Jeffery 宛の手紙の中で記すように、その年最も楽しんだことが “Ode on Indolence” の執筆であったということは興味深い。詩の中で率直に本心を明かすことによって、喜びや救いが得られたからであると解釈できる。“Indolence” への夢が実現せずとも、現実逃避の感情を表出できたという満足感からであろう。また C. L. Finney は、六週間の詩作の緊張が原因で襲われた怠惰な気分をもとにして、五月末に “Ode on Indolence” を書いたと推測している¹⁰⁾ が、確かにこのことも執筆の原動力になったと考えられる。そのような緊張からの解放という意味においても、本詩の創作を「最も楽しんだ」という Keats の心境は頷ける。

一方、現実問題として Keats が生を全うするためには、生きるための支柱である “Love” と “Ambition” と “Poesy” の実体を把握し、実生活の中で体験し、実相を受け入れなければならない。目の前に立ちはだかる厳しい現実を十分に認識しているからこそ、この三者の正体を見抜きながらも向きあい受容する覚悟まではできずにいる自身に苛立ちを覚えていると受け取れる。詩編の最後で、“... from my idle sprite/Into the clouds, and never more return!” (59-60) と書いているように、Keats は “Shadows”, “Ghosts”, “Phantoms” と

7) Claude Lee Finney, *The Evolution of Keats's Poetry* (Cambridge: Harvard University Press, 1936) 648.

8) John Holloway, “The Odes of Keats,” G. S Fraser, ed., *Keats: Odes* (London: Macmillan, 1971) 172.

9) “Ode to a Nightingale,” 52.

10) Finney 646.

呼ぶ三者のことを“clouds”に属すべきものであると考えている。しかし、実は、対象が雲のようにとらえようのないものではなくて、自身がとらえようとせず、Keatsの決意が定まっていないと解釈できる。

1818年3月13日の Benjamin Bailey 宛の手紙で、“Things semireal such as Love, the Clouds &c which require a greeting of the Spirit to make them wholly exist”¹¹⁾と明示しているように、Keatsにとって雲は愛と同様に半ば実在的なもので、完全に存在させるためには精神の歓迎が必要である。なすべきことを実行し、精神が迎える時を待つしかない。そして、Keatsのなすべきこととは、“Love”については Isabella Jones への思慕を断ち切り、Fanny Brawne との愛を成就させることであり、“Ambition”については詩作を続けることである。そうすれば、名声についての詩の中で“Fame, like a wayward girl..../Then, if she likes it, she will follow you.”¹²⁾と書いているように、気ままな少女のような名声は、「気があれば追いかけてくる」¹³⁾ものである。

また、“Poesy”については、1818年2月27日の John Taylor 宛の手紙の中で次のように言及している。

1st I think Poetry should surprise by a fine excess and not by Singularity...2nd Its touches of Beauty should never be half way....That if Poetry comes not as naturally as the Leaves to a tree it had better not come at all.¹⁴⁾

このように、詩は美の過剰によって驚きがあり、自然に生まれるものであると Keats は考えていた。しかし、Keats 自身の生活苦に加えて弟 George のアメリカでの投機の失敗が重なり、生活は困窮を極めていた。それゆえ、C. L. Finney が指摘する¹⁵⁾ように、物語詩“Lamia”や劇詩“Otho the Great”といった読者や観客を意識した、売れる作品を完成させなければならなかったのである。詩は美と密接な関係があり、自ずとあふれるものであることを Keats は目指していたが、経済的な事情がこれを阻んだのである。

その他には、1818年に *Endymion: A Poetic Romance* が *The Quarterly Review* と *Edinburgh Magazine* で酷評されたり、1818年12月に病死したばかりの弟 Tom と同じ肺病

11) To Benjamin Bailey, 13 March 1818 73.

12) “Fame like a wayward girl will still be coy,” 1-14.

13) “Fame like a wayward girl will still be coy,” 14.

14) To John Taylor, 27 February 1818 69-70.

15) Finney 648.

に侵されていたこともあり、当時の Keats を取り巻く状況は極めて厳しかった。

このような中で Keats は現状から逃れることを願う。しかし、無になりたいと意識している限り “nothingness” や “Indolence” に身をゆだねることはできず、絶望的な現実逃避願望の域を出ない。すべての現実を、ひいてはやがて訪れる自らの死をも受け入れ、生の対極のものとしてではなく、生の一部として死をとらえられるようになる時、無の境地で “Indolence” を楽しめるのである。本詩の冒頭で聖書から引用した “They toil not, neither do they spin” というモットーを掲げたのは、すべてを受け入れる覚悟もできず、また “Indolence” にも安らぎを得られない苛立ちと焦燥感の表れと受け取れる。“Indolence” を自身に押しつけ、求めるよう言い聞かせているようである。

そして、このように現実には押しつぶされそうになりながらも逃避しようとする Keats の姿を描いた “Ode on Indolence” は、多忙を極め様々な重圧や緊張に日々神経をすり減らした現代人の共感を呼び、苦悩を代弁するものでもある。そして、精神の解放をもたらし、救い、あるいは癒しとなる。しかも、作り手が創作を楽しんだのであるから、読み手にもその喜びは少なからず伝わるはずである。

さらに、後に Keats は “Negative Capability” の境地に達するが、“Ode on Indolence” は “Negative Capability” にも通じる “nothingness” を希求するという点で、その萌芽が見受けられる詩としても忘れてはならない作品である。それゆえ、他の作品より劣るという理由で、*Lamia, Isabella, The Eve of St. Agnes, and Other Poems* に収められなかったのは遺憾である。

1819年の秋には Keats は死をも覚悟し、比較的穏やかな精神状態でいられるように見える。これは、“... *Negative Capability*, that is when man is capable of being in uncertainties, Mysteries, doubts, without any irritable reaching after fact & reason....”¹⁶⁾ と Keats が定義する “Negative Capability” の哲学に支えられているところが大きいように思われる。しかし、人間味あふれる一人の詩人としての Keats の魅力は、完成度が最も高いと賞賛される “To Autumn” よりも、焦りや不安に苦悩する彼の生の姿がありありと映し出された “Ode on Indolence” にむしろ強く感じられる。“There is a feeling of spiritual and physical exhaustion absent from the earlier entry: the disappointments, tribulations, journeyings, almost feverish creativeness of the intervening twelvemonth have taken their toll.”¹⁷⁾ と B. Blackstone が指摘するように、当時 Keats は失望、苦難、旅行、創作が原因の心身の極度

16) To George and Tom Keats, 21, 27 (?) December 1817 43. この手紙の日付については12月21日か27日かが不明であり、注は Robert Gittings 編の書簡集中の表記通りとする。

17) Bernard Blackstone, *The Consecrated Urn* (London: Longmans, 1959) 314.

の疲労で悲鳴をあげていたのである。それゆえ、一瞬でも休息や無感覚や“Indolence”をただ純粹に求めようとするが、これは自然なことであり、現代の読者も感情移入することができる。しかも、“Ode on Indolence”は、英国の自然やギリシャの芸術についてではなく、感情(“heart”)と理性(“mind”)の葛藤や、怠惰の夢を描写したものである。万人の共感を得うという点で時空を越えた魅力を持つ。

先に引用した Keats の手紙について再び注目したい。クリケットのボールが目にあたった時のことを、「肉体が精神を征服する時に生じる利益の稀な例である」とし「これこそが幸福である」¹⁸⁾と言うが、勤勉で強靱な精神力の持ち主である Keats は、このように怪我のために精神力が低下している時のみ“Indolence”に陶醉できるのである。手紙ではこの特殊な状況について言及しているが、詩中では、精神が目覚め肉体を圧倒し始め、あるべき姿に立ち戻らなければならないとする動きが見られる。

このように、Keats は“Ode on Indolence”執筆時には“Indolence”に喜びを見いだせてはいない。後にあらゆるものを受容することができるようになると、対象に同化し、楽しめるようになる。Keats 自身が無になり、彼にとってすべてが無となるのである。そして、Keats は、本詩に見られるような、苦悩も歓喜もない無感覚という意味での“nothingness”に逃避するのではなく、“Negative Capability”にも通じる、あらゆるものを内包した“nothingness”の境地に到達することになる。Keats にとっての「無」は逃避や忘却から解放や自由へとその意味を変える。“Ode on Indolence”は、詩人としてそして人間としての成熟への更なる一歩を踏み出せずにいる Keats の葛藤を描き、彼の真実の悲痛な魂の叫びをこだまさせながらも、同時に彼の成長を予感させる重要な作品である。そして、本詩の中で“Indolence”への憧れと現実の間で揺れる Keats の心理の跡を辿ることにより、過酷な現代社会に生きる我々は、安堵し心癒されるのである。

18) To George and Georgiana Keats, 14 February-3 May 1819 228.